



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	17世紀のロシア人探検家が見たカムチャツカの先住民族：アトラソフの『第二の話』に基づいて
Author(s)	スクーチナ, イリーナ
Citation	北方人文研究, 15, 23-42
Issue Date	2022-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84604
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_03_Skutina.pdf



17 世紀のロシア人探検家が見たカムチャツカの先住民族： アトラソフの『第二の話』に基づいて

イリーナ・スクーチナ
(北海道大学大学院文学院)

要旨

本研究は、17 世紀にカムチャツカ半島を訪れたロシア側の探検家がまとめた資料を歴史的な背景を配慮しながらエスノグラフィーとして読むことによって、ロシア人は当時、カムチャツカ半島南端とカムチャツカに近い千島列島の島に居住していたクリル民族をどのように捉え、どのように表象したかということに焦点を当て、その意味と理由を考察することを目的とする。カムチャツカ半島は、17 世紀の半ばにロシア帝国のコサックにより「発見」され、1697 年にアトラソフの探検隊によってロシア領とされた。ロシアの一部となった他のシベリア地域のように、カムチャツカもあらゆる側面から調査の対象となった。もちろん、ロシア人はカムチャツカの先住民族にも興味をひかれたので、その身体的な特徴や言語、生活様式についても記述している。その先住民族の中の 1 つが、カムチャツカ南端と、半島から南に延びる千島列島の島々に住む「クリル人」とロシア人に呼ばれていた民族であった。19 世紀の初めにその民族の姿がカムチャツカから消滅したが、カムチャツカを探検した人からの記述が少々残されている。その内の 1 つがコサックのウラジーミル・アトラソフの『第一の話』、『第二の話』として知られている報告がある。本研究では特に『第二の話』を中心に、先住民族とロシア人との関係性、また先住民族に対するロシア人の姿勢を見ていく。

はじめに

本研究は、17 世紀にカムチャツカ半島を訪れたロシア側の探検家や研究者がまとめた資料を歴史的な背景を配慮しながらエスノグラフィーとして読むことによって、クリル人をどのように捉え、どのように表象したかということに焦点を当て、その意味と理由を考察することを目的とする。最後に、この文献調査を通して見えてきた問題や疑問点、および残された課題を挙げる。

ここでいうクリル人は、当時のカムチャツカ半島南端とカムチャツカに近い千島列島の島に滞在していた民族のことを意味する。現在は民族集団として消滅している。ロシアにおいて「クリル人」とはアイヌ民族の別称に当たると理解されている (Таксами, Косарев 1990 : 3 ; Высоков, Василевский, Костанов, Ищенко 2008 : 613)。「クリル」とは、おそらくアイヌ語の kur「クル」(「人」¹⁾) のロシア語化された言葉であり (Полевой 1982 : 11)、以前はロシア人に千島列島とカムチャツカ南端の住人を指すために使用されていた。したがって、千島列島も「クリル列島」として、カムチャ

1) アイヌ語の千歳、美幌、幌別、静内、十勝、石狩川、沙流、カラフト方言においても kur は「人」という意味をもっている (公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2011a、2011b、2011c、2012a、2012b、2014a、2014b、2014c)。

ツカ南端は「クリル地方」として知られていた（クリル列島の場合は、現在に至るまでロシア語において千島列島を示している）。このクリルの民族は、17～18世紀の探検家、特にステパン・クラシェニンニコフ（Степан П. Крашенинников）に記述されている。クリル人の神についての信仰を述べるクラシェニンニコフが、クリル人は「イングル」（«Ингуль»）、または「インナフ」（«Иннаху»）という「クルクルとカールした削りかけ」を拝礼の対象とし、その削りかけにはじめての獲物を捧げていたと主張している。クリル人が獲物の肉を食べ、その毛皮だけを削りかけのとなりに飾ったと報告されている（Крашенинников 1755b:181）。その報告は民族学者レフ・シュテルンベルク（Лев Я. Штернберг）が記述するアイヌ民族の「イナウ」という削りかけの習俗とよく似ている（Штернберг 1936:50-61）。また、クラシェニンニコフが作成した「クリル民族語彙集」に、現在北千島方言のアイヌ語として知られている言葉の語彙が書かれている（Крашенинников 1755b:185-188）。その語彙集は、幌筈島（パラムシル島）の住人から収集されたもので、アイヌ語の北千島方言の記録においてはじめての「真剣な試み」とされている（Sato & Bugaeva 2019:71）。

本研究において分析する資料の言葉を借用して「クリル人」という名称を使い続けることにする。

1. 研究背景

カムチャツカ半島は17世紀の半ばにロシア帝国のコサックにより「発見」され、1697年にアトラソフの探検隊によってロシア領とされた。ロシアの一部となった他のシベリア地域と同様に、カムチャツカもあらゆる側面から調査の対象となった。そのため、コサックや探検家、研究者、軍人の手により書かれた、半島とその周辺の島々の地理などのテーマに関わる報告書や論文が存在する。特に、彼らはカムチャツカの先住民族にも興味をひかれたので、その身体的な特徴や言語、生活様式についても記述されている。その先住民族の中の1つは、カムチャツカ南端²⁾と、半島から南に延びる千島列島の島々に住む「クリル人」とロシア人に呼ばれていた民族であった。19世紀の初めにその民族の姿がカムチャツカから消滅したが、カムチャツカを探検した人からの記述が残されている。

その記述の多くが歴史的な研究の対象になってきたが、これまでは文化人類学的な側面から十分に研究されてこなかった。カムチャツカに来ることで、ロシア人はクリル人も含めた先住民族と必然的に接触することになった。では、先住民族という他者との出会いを、彼らはどのように捉え、どのように解釈したか、その解釈の背景に何があったのかについてより深く調べる必要がある。オリエンタリズム批判やフロンティア理論などの植民地状況における他者表象を分析するアプローチに依拠しながら、17世紀の探検家の記録を批判的に考察することによってその著者が複雑な関係性の中で活動したことが明白になり、カムチャツカと千島列島の歴史、そしてロシア側の人と先住民族、特にクリル人との関係が新しい側面から見えてくるだろう。

2. 文化人類学と植民地主義

2.1 帝国主義と植民地主義

植民地主義は、古代ローマやギリシア、そして大航海時代として知られる15～20世紀という時代

2) カムチャツカ南端の住人は、文献によって違うように定義される。本研究において取り上げる歴史的文献は、それらの人たちのことを「クリル人」として位置づけるか、それとも曖昧な立場を取っている。当時の他の文献（Стеллер 1999）において、その住人は南に住む「イテリメン」として記述されている。

と密接に関わっている。植民地主義の精確な定義は、帝国主義との関連性の影響で議論しつつあるが、スタンフォード哲学百科事典（2017）によると、植民地主義は基本的にある1つの社会的集団により行われる、別の社会的集団を服従させるという支配の実践として理解される。しかし、具体的な支配のしかたに焦点をおく帝国主義の概念と違い、植民地主義では過程としての入植が強調される。多くの場合に植民地主義は、支配国の価値観、言語などを入植地の現地の人（先住民族）に受け入れさせることを前提とする。

2.2 ポストコロニアル研究

1970年代になると、学術分野においてポストコロニアル理論が重視されるようになった。その理論には、植民地時代以降の政治的、経済的、社会的などの状況という意味と、旧植民地の受けた、あるいはまだ受けつつある支配国の影響の批判的な分析という意味がある（大谷 2011：266-268）。ポストコロニアル研究は幅広いトピックをカバーしているが、その内の1つは、支配国によって作り上げた・作り上げつつある文化、言語、学術、などの分野における「支配国の優越」と「植民地の劣等」を訴える特種なイデオロギー、またはその方法論になっている。ここに特に密接に関わるのが、他者表象である。

文化人類学において他者表象という概念には、「描写」と「代表」という2つの意味が込められている。描写とは、民族誌という人類学的な調査方法の基本となっており、記述することを示す。そして代表とは、民族誌などの研究において「誰かは誰かを代表する」ということである。代表者、代表相手、そして代表の目的は不明確である場合が多いため、他者表象において「代表」は特に問題視されている（桑山 2014a：189）。

また、現地の生活リズムなどを乱し、特に開発によって強く直接的な影響を受ける現地の人より大きい権力をもつ人類学者とその調査協力者の間に生じる不平等な権力関係にも焦点を当てられた（Escobar 1991）。

このようなポストコロニアル理論の先駆けになったのは、アルジェリア独立運動に積極的に参加した知識人フランツ・オマー・ファノン（Frantz Omar Fanon）であった。1952年の『黒い皮膚・白い仮面』（“Peau noire, masques blancs”）、そして1961年の『地に呪われた者』（“Les Damnés de la Terre”）において彼は、植民地の経済的な状況と、人種や民族の差異との密接な関係を指摘し、植民者と被植民者両者の状況を調査し、植民地化の影響で後者の抱えてきた劣等感を特に注目しながら植民地主義を批判した（大谷 2011：267）。

しかし、1978年に出版された、エドワード・ワディ・サイード（Edward Wadie Said）の著作の『オリエンタリズム』（“Orientalism”）はよくポストコロニアル理論の起点として挙げられる（Said 1979；大谷 2011：268；Hamadi 2014：39；Mtairi 2019：2）。その研究においてサイードは実例を挙げながら、オクシデント（西洋）がオリエント（東洋）を弱者として、つまり、自分の正反対的な者として描くことによってその植民地支配を正当化することに焦点を当て、批判した（桑山 2014b：190；大塚 2008：179）。

その研究は、イギリス、スペイン、などのようなヨーロッパの国々の植民地に注目を当て、ヨーロッパ人による他者表象をテーマとしていた。しかし、シベリアを事実上に植民地化したロシア、そしてロシア側の人による他者表象はそのような研究の対象とされなかった。18世紀にシベリアの一部としてされていた（Lantzeff & Pierce 1973：196-218）カムチャツカもそういう側面から特に取り上げられていない。

2.3 オリエンタリズムとオリエンタリズム批判

パレスチナ出身のアメリカ人思想家エドワード・ワディ・サイードの著作『オリエンタリズム』出版前に、「オリエンタリズム」はヨーロッパから見た東方世界という「東洋」（久米 2018）に対する興味や趣味、また、東洋を研究する学問分野を示すために使用されていた（大谷 2011：269）。一方、サイードは、フランスの哲学者ミシェル・フーコー（Michel Foucault）がいう権力と言説の関係に基づき、西洋による東洋（中東を中心に）の表象の仕方で作られた東洋の特殊で非現実的なイメージ、またはそのイメージを維持するイデオロギーをオリエンタリズムと呼んだ（大谷 2011：269）。

このような状況に複雑な歴史的で文化的な背景があるとサイードが主張し、その理由として世界を言語、メンタリティーなどのカテゴリーに一般化し、それらに評価を与える傾向を挙げる（Said 1979：227）。逆に言えば、東洋の言語などのカテゴリーについての言及は、自動的に東洋全体についての言及として理解されることになる（Said 1979：255）。つまり、東洋についての知識は東洋を支配する権力になる（Said 1979：256）。

それを可能にするのは、前提となっている自己—他者という二項対立である（Said 1979：227）。そこに西洋という自己は合理的、先進性、誠実、などとして（西洋人自身の手によって）表象される一方、東洋の他者は非合理性、後進性、不誠実、などの負の表象を与えられた（大谷 2011：270-271）。後者（他者）はいつも前者（自己）に支配される（Said 1979：227）。

それで自己と他者の差異は強調され、対比の対象となることで対立をもたらす（桑山 2014b：190-191；Said 1979：256）。サイードは、それを東洋の「本質」の誤った表象ではなく、歴史的、知的といった状況における目的に合わせた表象として見る（Said 1979：273）。つまり、西洋による東洋に対する言説は西洋の植民地主義や帝国主義を正当化する方法の1つとなっている（大谷 2011：270）。

その一方、『オリエンタリズム』がいう西洋—東洋の二項対立はあまりにも静的で固定的な関係として取り上げられること、植民地の政治・経済展開の歴史的な分析の不足、そして被植民者にあまり焦点を当てずにほとんど植民者の言説だけに集中する点は批判にさらされた（大谷 2011：270）。

3. 米国におけるシベリア植民地化の研究とその特徴

アメリカ人歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナー（Frederick Jackson Turner）は「フロンティア」という概念を導入し、アメリカ史においてその重要性を主張した。フロンティアとは、メトロポリスという中心から前進する植民地化の最前線のことである。ターナーが指摘するように、アメリカの西方拡張によってできたフロンティアは文明と未開の接続点となった（Turner 1893）。支配中心から離れれば離れるほどフロンティアにいる人は荒野に影響され、社会全体より家族を中心にすることでより未開な状態に戻りつつあったとされる。結果的にフロンティアは特殊なアメリカ人性格の形成、そして民主主義を促進し、アメリカ独立戦争の原因の1つになった（Turner 1893）。しかし、ターナーの「フロンティア」が文明と野蛮を前提とする概念であったこと、そしてその具体的な意味の曖昧さは批判を招いた（Parker & Rodseth 2005：5）。

アメリカ人歴史家ベネディクト・ハンフリー・サムナー（Benedict Humphrey Sumner）は、フロンティア理論をロシア植民地化過程の文脈に応用しようとした。サムナーの理解では、フロンティアとは効果的な支配を承認した境界であり、その境界はロシアに貢物を支払う民族と遊牧民によって定義されている（Sumner 1947：11）。フロンティアには言語的フロンティア、宗教的フロンティ

アなどの種類があると認められているが、サムナーは自分の研究において特に経済的フロンティアに焦点を当て、それをロシアの森林、草原、などという環境と結びつける。ロシア人は森林、または森林から得られる毛皮を求め、極東へ進んでいったと考えられる (Sumner 1947: 29)。

貿易の資源として大切な毛皮の要求以外、ロシア人による東方などの迅速な推進には他の理由もあったとサムナーは述べている。第一に、狭義でシベリア、広義でアジアの気候、地形などがロシア人の慣れていた環境とよく類似しており、新しい環境に適応する必要がなかった。また、アジアに住む民族はよくお互いに敵同士であり、民族間戦争に勝つためなどの理由でロシア人の味方になることが多かった。それと同時に、大部分が「低い発展段階」に属するその民族は、ロシア人の優れた武器（銃）に抵抗する方法をもたなかった。探検家のパーソナリティーも推進において大事な役割を果たした。最後には、東方推進はよく個人の勝手な行動によるものであったが、ロシア政府がその背中を追って要塞などを建設することによって新しい領土を管理の対象とした (Воробьева 2012: 66)。18世紀になると、政府はより積極的にシベリア征服に参加し、鉱物に目を向けた (Sumner 1947: 32)。

上記したように、サムナーはスペインなどによって行われた植民地化との比較に基づき、シベリア征服の迅速な推進を強調する。レイモンド・ヘンリー・フィッシャー (Raymond Henry Fisher) は、シベリア征服の状況を北米の探検や植民地化とほぼ同様なものとして見なしたが、先住民族が支払うヤサーク（現物税、毛皮税）の義務付けを重要な差異として挙げ、北米より征服の早い成功をその影響によるものとして述べている (Воробьева 2012: 170)。その一方、バジル・ドミトリシン (Bazil Dmitryshyn) は、多くの側面からロシアと西洋の植民地化の類似性が見られると指摘し、植民地化の方向性、植民地から得られる資源・資料の種類、そしてシベリアにおいてロシアの独占という根本的な差異もあったと述べる。植民地化の方向性というのは、西洋の国々が海で西方、南方に推進していたのに対して、ロシア人は地上で東方に向かっていったことである。また、西洋の支配国は植民地から香辛料や果物、宝石や金、銀という鉱物を取ったのに対してロシアはシベリアからほとんど毛皮（後年には鉱物も）を取った。最後に、シベリアにおいてロシアにはロシアから支配国の立場を奪われる競争相手がなかったことで、シベリアを独占することができた (Воробьева 2012: 190-191, Dmitryshyn 1988: 43-44)。

アメリカ人歴史学者は植民地化による先住民族への影響にも注目を向けている。例えば、リチャード・オースティン・ピアス (Richard Austin Pierce) は、先住民族共同体の破壊、病気やアルコールなどによる著しい人口減少、資源を尽くすほどに行われた毛皮目当ての過剰狩猟、などという破滅的な悪影響を挙げるが、ロシアでなければ他の国が資源の非常に豊富なシベリアを征服に来ただろうという意味で、その状況を、先住民族の「回避できなかった運命」として説明している (Lantzeff & Pierce 1973: 230)。フィーシャもピアスと似たような考えを示しているが、特に他の支配国に比べればロシア政府の先住民族に対する温和な政策に注目する。しかし、彼は植民地に派遣された役人が必ずしもその政策の方針に従ったわけではないことも指摘する (Fisher 1943: 28-43)。ロシアの管理のしかたについて書いていた歴史学者フランク・アルフレッド・ゴルダー (Frank Alfred Golder) は、役人の不誠実な活動による先住民族が貢物を納める苦勞、またコサックなどの探検家の残酷さの例を挙げている (Golder 1914: 18, 40, 45, 51)。シベリアの一部とされていたカムチャツカ半島 (Lantzeff & Pierce 1973: 196-218) の場合には、その残酷さは現地人の強い抵抗の反応を起し、その抵抗の運動がロシア人のさらなる酷い反応をもたらし、戦争に近い状態まで至った (Fisher 1914: 90)。

サムナー、ドミトリシン、などのアメリカ合衆国の歴史学者の研究に基づいてロシアのフロンティア前進に関与した人を次のように分類できる。もっともアクティブな行動をしていたコサックはもちろん、他には政府から姿を消そうとした犯人などの流浪人、商人や狩猟者、自由意志から空き地を探そうとした人や農民、他の役人、流刑囚などであった（Воробыёва 2012: 80, 122, 161-162）。

それらの研究は、シベリア植民地化歴史の全体的な流れに焦点を当て、その全般的な特徴などを調査の対象とするが、植民地化過程を形作っていた多様な人物の主観的な見方をあまり取り上げていない。

4. 本調査の概要

4.1 カムチャツカの紹介と探検の歴史

カムチャツカ半島とは、ユーラシア大陸の北東にある、北から南まで伸びた細長い半島である。東側はベーリング海、北東側は太平洋、西側はオホーツク海に面している。北端には、半島を大陸と結ぶパラボリスキーという細い地峡があり、南端はロパトカという岬であり、その岬のさらなる南には、半島から海峡で分かれている千島列島の占守島がある。半島の面積は約 270 km² を占めている。その面積の約 3 分の 2 が 3 つの山脈に占められている。火山が多く、地震活動が盛んになっている地域である。その影響で、温泉や沼の湖や間欠泉なども多い³⁾。

カムチャツカとはもともと半島のある大きな川の名称であったが、その名は 1690 年代ごろに半島全体を示すようになった。「カムチャツカ」の語源は不明であり、その謎が 20 以上の仮説をもたらした。その内の 1 つは、布の名だとする仮説である。その仮説によると、当時に緞子は「カムチャ」、「カムチャトカ」とロシア語で呼ばれていた。このような素材の衣装を着ていたクリル人、もしくは日本人がその川の周辺で見られたから、このような地名になったかもしれない（Полевой 1997a: 102-103）。ただし、カムチャツカ南端のクリル人がそこからかなり離れたカムチャツカ川まで行けたかどうかは不明である。もう 1 つのクリル人に関わる説がある。そのクリル人はアイヌ語を用いたと考えられるが、その仮説によると、カムチャツカはアイヌ語の kam 「カム」（「広がる」）、cak 「チャク」（「はじける」、「飛び散る」、「爆発する」）と ka 「カ」（「ところ」）という言葉に由来する地名であるという考え方もある（Акулов 2017）。しかし、カムチャツカ川はクリル人が住んでいた半島の南端から比較的遠く離れているため、その仮説がどれほど正しいのか定かではない。

2021 年現在、カムチャツカ半島、北部のコリャーク自治管区（Корякский автономный округ）、コマンドルスキー諸島とカラギンスキー島はカムチャツカ地方（Камчатский край）というロシア連邦の構成主体として成立している。カムチャツカ地方が、2007 年にカムチャツカ州（Камчатская область）とコリャーク管区という 2 つの異なる行政区分の合併によって成立した。カムチャツカ州というのが 1803 年をもってはじめてロシア帝国の一部として公式的に成立した⁴⁾ が、ロシア領となったのが 1697 年であった。18 世紀以降、カムチャツカはシベリアの一部とされていた（Lantzeff & Pierce 1973: 196-218; Аров 2003: 53）が、19 世紀後半になると、「シベリア」という大空間の区分によってできた「極東」はシベリアと区別されるようになり、カムチャツカもシベリアではなく、

3) ロシア文化省の「文化」ポータルサイト、「文化」と世界自然保護基金ロシア部特別共同企画：「地図に載せた場所：カムチャツカ編」（仮訳）、2020 年 12 月 14 日参照、<https://www.culture.ru/s/kamchatka/>

4) カムチャツカ地方公式 HP、カムチャツカ概要、1.8 歴史について（仮訳）、2020 年 6 月 27 日参照、<https://www.kamgov.ru/overview>

極東の一部と見なされるようになった（カラキン 2014）。

ロシア人がカムチャツカを「発見」した歴史に関して不明なところが多いが、ロシア人の探検家が17世紀前半あたりにはじめてカムチャツカの北部までたどり着いたとされている。ミハイル・スタドゥヒン（Михаил Стадухин）、イワン・カムチャトウイ（Иван Камчатый）、イワン・ルベツ（Иван Рубец）、などの探検家の名前がカムチャツカの歴史に残っている（Полевой 1997b；Сергеев 1992：39-40）。17世紀後半にカムチャツカにきたコサックのウラジーミル・アトラソフが率いる探検隊がカムチャツカ奥部までのロシア人推進において重要な役割を果たした。

彼らはカムチャツカはじめてのロシア人のオストログ（要塞）を建築し、先住民からヤサーク（現物税）を求めた。最後に、成功した探検を祝う記念十字架をたて、1699年をもってアトラソフがカムチャツカを後にし、ヤクーツクというシベリアにおけるロシア人基地に戻った。アトラソフのカムチャツカについての報告がロシア皇帝の興味を引いた。

1711年にカムチャツカに残されたコサックたちは、自分が犯した反逆に対して皇帝の恩赦を求め、調査をしに千島列島へ行った。作成した地図やほかの収集した情報を役人に渡した。

当時、千島列島がアメリカ大陸に近いという考え方があったので、毛皮が豊富だと思われていた北米への道の「発見」にロシア帝国が興味をもち、カムチャツカと千島列島へ探検隊を派遣したが、望ましい成果を得なかったため、1724年に皇帝の指示によって特別な探検隊が成立された。そのリーダー役をデンマーク出身の航海士のヴィトウス・ヨナセン・ベーリング（Витус Ионассен Беринг）が引き受けた。その探検が「カムチャツカ探検」（Камчатская экспедиция）として知られるようになり、2回も行われた。1725～1730年の第1次カムチャツカ探検（1-ая Камчатская экспедиция）が極東の地図作成などに貢献したが、アメリカ大陸海岸に着岸できなかった。そのため、第2次カムチャツカ探検（2-ая Камчатская экспедиция）の派遣が決定され、1733-1743年にわたって異なる目的を目指す複数の隊によって行われた（Воробьева et al 2015：15-18）。その探検の科学者隊には、カムチャツカ半島の研究において特別な役割を果たしたステパン・クラシェニンニコフ（Степан П. Крашенинников）とゲオルク・シュテラー（Георг Вильгельм Стеллер）が参加していた（Воробьева et al 2015：20-21）。カムチャツカの滞在時期や期間がそれぞれ異なっていた2人が、お互いに知り合いであり、同じ科学アカデミーに所属し、カムチャツカ調査の成果を本として出版した。

カムチャツカの先住民とロシア人との関係は困難なものであった。カムチャツカがあまりにも離れている場所なので、ロシア人（特にコサック）が国からの罰を恐れずに勝手な行動を取ったからである。ヤサークを過剰に取られたり、無理やりに働かせられたり、役人の分まで狩猟させられたりするという様々な目に遭った結果として、先住民が自分の集落を放置してロシア人の手が届かない場所へ移動したり、または反乱を起こしたりしていた（Тураев 2012；Сергеев 1992：42、49）。反乱はロシア人により厳しく抑えられていた。それらの困難と民族・部族間の戦争、そしてロシア人が半島にもってきた流行の病気の影響で先住民の人口が著しく減ってしまった（Тураев 2012：130；Сергеев 1992：51）。

18世紀後半からロシア人の農民がカムチャツカに移住することになると、先住民へのコサックの影響は力を失った。それを境に、ロシア人と先住民の関係が緩和され、より共存的な方向へと向かった（Тураев 2012：132）。交流の中でロシア語と先住民の言葉を混ぜた独特な方言が生まれたことに加えて、先住民が銃やより長持ちするロシア式狩猟道具を使用するようになり、反対にロシア人が、先住民から狩猟と釣りのしかたやカムチャツカの生活において重要な道具などを借用した（Сергеев 1992：52）。

4.2 カムチャツカの先住民民族

17～18世紀にカムチャツカ半島に居住していた先住民民族は、コリヤーク、イテリメン（旧称：カムチャダール⁵⁾）、クリル人であった（Крашенинников 1755b：2；Тураев 2012：132；Габышев, Маякунов 2018）。

カムチャツカのクリル人（現在はカムチャツカ・クリル、カムチャツカ・アイヌ、アイヌとして記述されることがある）がカムチャツカ半島の南に住んでいた。残っている記録が少なく、その生活や起源などについて議論が多い。

コサックのアトラソフが、カムチャツカ南端をクリルの地方と呼び、「クリル地方の第一番目の川」といったゴリギナ川（река Голыгина）の周辺でクリル人の集落を見つけ、ヤサークの支払いを断られたという理由でクリル人と戦うことになったが、結局クリル人にヤサークとしてもらえるものを見つけずに去った（Оглоблин 1891：9-10；Крашенинников 1755b：193；Берг 1935：86-87）。

クラシェニンニコフが1755年に発表した『カムチャツカ地誌』というカムチャツカやカムチャツカに近い千島列島の島の調査記録によると、カムチャツカ先住民民族は特定の場所を示すために、その場所に住んでいる民族の名称を地名として使用したものであり、ロバトカ岬周辺のカムチャツカ南端は、そこに住んでいたクリル人からクリル地方と呼ばれていた（Крашенинников 1755a：5-6）。また、1650年から1855年までのカムチャツカの歴史を描く19世紀の歴史家のスギブネフも、南カムチャツカが「クリル地方」として知られ、その住人が「黒っぽいクリル人」だったことを記載している（Сгибнев 2005）。

しかしながら、クラシェニンニコフ自身がロバトカと占守島の住人をカムチャダールの一種としており、第二島（幌筈島）以降の島の住人をクリル人として分類した（Крашенинников 1755b：2）。クリル人のさらなる分類を記述するときにクラシェニンニコフは、ロバトカと占守島の住人を示す「近方クリル人」と幌筈島以降の住人を示す「遠方クリル人」という分類のしかたの存在を列挙し、ロバトカ住人の身体的特徴、言葉と儀礼がカムチャダールと異なっていることを承認しながらも、ロバトカ住人はカムチャダールから由来していることが「確実に知られている」（Крашенинников 1755b：3）から、カムチャダールの一種であると再び主張する（Крашенинников 1755b：3）。幌筈島以降の住人の場合は、彼が同じくカムチャダールとの圧倒的な類似性を述べていても、クリル人として認めている（Крашенинников 1755b：179）。それらと同時にクラシェニンニコフは、文献中においてロバトカの住人をクリル人と呼び続けることがある。

そして、シュテラーにより書かれた1774年の『カムチャツカ地誌』（クラシェニンニコフの文献と同名）には、ロバトカ人の言葉がイテリメン語と似ており、儀礼や習慣の少しの差異がロバトカの地理への対応によって生み出されたものとして説明され、ロバトカの住人が「真のイテリメン」として記述される。ただし、ロバトカの住人がイテリメンと名づけられると同時に、ときとして他のイテリメンと対照的にただ「ロバトカの住人」として記載されることも、「ロバトカの住人とクリル人」という形で島のクリル人と一緒にされることもよくある（Стеллер 1999）。

5) もともとカムチャツカ川の名称から由来した「カムチャダール」という言葉には実に多くの意味が込められている。17～18世紀の文献に出てくるカムチャダールとは、カムチャツカ川の周辺に住んでいた民族を示した。現在その民族がイテリメンとして知られている（Введенский 1953：552）。しかし、カムチャツカの先住民民族（特にイテリメン）とロシア人との間の結婚が増えると、そういう結婚で生まれた子供やその子孫がカムチャダールと呼べるようになった。20世紀になると、カムチャダールは民族性を問わずにカムチャツカ出身の人の総合的な名称として使用されるようになった。

上記のように、取り上げる資料に出てくるロパトカ住人の記述が非常に複雑である。そのために、本研究においてロパトカの住人を他民族の文化的な影響を受けたアイヌか、イテリメンか、それともアイヌとイテリメンの間の結婚によって生まれた特殊な民族集団と呼ぶべきか判断に迷うが、本論文の目的を考慮した上で、当時の資料において頻繁に使用される「クリル人」、または「ロパトカの住人」という呼び方をそのままに利用することにした。

19 世紀の初めまで次々と流行ったチフス、疱瘡、麻疹、そして飢餓で大勢の人が亡くなり、多くの集落が絶滅した（Сгибнев 2005）。生き残ったカムチャツカのクリル人は千島列島へ避難したことで、彼らの姿が南カムチャツカから消滅した（Тураев 2018：215）。

1875 年の樺太・千島交換条約（サンクト・ペテルブルク条約）の結果として、占守島と幌筈島のアイヌは部分的にカムチャツカに移住させられ、カムチャツカのクリル人が住んでいた南部の地域に渡って、ヤヴィノ村（Явино）に住むことになったとされている（Шубин 1992：45、51）。ソ連時代にその村の住人たちの多くは同じ地域のザポロージェ村（Запорожье）に移住させられ、ほぼ同化された。

2010 年度ロシア全国国勢調査でカムチャツカ地方に自らがアイヌであると回答した人数は 94 人であった⁶⁾。

5. ウラジーミル・アトラソフと『第二の話』

5.1 ロシア側の探検家とその文献の紹介

コサックのアトラソフがカムチャツカの奥部まで進出することができたのはじめての人物であり、その『話』と名付けた報告書がはじめてクリル人を含めカムチャツカ先住民民族のエスノグラフィックな記述を記載している。この著者がカムチャツカを訪れた 17 世紀には、カムチャツカ南端にクリル人がまだ居住し、その生活様式などを著者が記述しているので、この文献を本研究において取り上げることにした。アトラソフの残した記述はロシア語で書かれており、以下における引用分は全て、筆者による翻訳である。

5.2 アトラソフの『話』とその評価について

1700 年 6 月にヤクーツクにアトラソフの話から記録された『第一の話』は、アトラソフ隊のカムチャツカまでの道とカムチャツカそのものにやってきたこと、起こった事件や反逆、出会った先住民民族とそれらからヤサーク税をとったかどうか、などについて報告している。

1701 年 2 月にモスクワのシベリア総督府において同様に記録された『第二の話』にアトラソフは、はじめにヤクーツクからカムチャツカへ辿りついた道と利用した交通手段などを具体的に述べ、現地の気候、動植物、地理に先住民民族の様子やその生活様式の話混ぜながらカムチャツカの話を話している（Оглоблин 1891：11-18）。『第一の話』と『第二の話』両方にはアトラソフの推測や先住民民族の人から聞いた話が含まれている。

アトラソフの『話』には当時、情報源として高い評価を与えられ、政府の興味をカムチャツカに

6) ロシア連邦国家統計局公式 HP、個別の民族籍の人口統計学および社会経済的特徴の面からの 2010 年度ロシア全国国勢調査結果、付録 3：ロシア連邦構成主体による「民族籍欄に他と回答した者」の人口構成（仮訳）、2020 年 1 月 27 日参照、http://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/results2.html

向かせた（Белов 1957：105；Окунь 1935：6）。

歴史学者ニコライ・オグロブリンはシベリア総督府においてアトラソフの『話』の原稿を発見し、1891年をもってそれらを原稿のままに発表した。オグロブリンによると、アトラソフのサインまで入った原稿の『第二の話』を、以前にアトラソフの『話』を読む際に参照していたシベリア史年代記に記載される『話』と比較すると、年代記編者はそれを歪めたり省略したり補筆したりしたことが明らかになる（Оглоблин 1891：4）。

1949年に生物学者・地理学者レフ・ベルグ（Лев С. Берг）はアトラソフの『話』が提供した民族誌的、また地理学的なデータを高く評価し、17～18世紀初期の探検家の記録の中でアトラソフの『話』をもっとも内容豊かなものとして位置づける（Берг 1949：22）。

5.3 アトラソフの『第二の話』において見られるカムチャツカ先住民族（クリル人を中心に）

アトラソフの『第二の話』は、もともとアトラソフの報告書であるために、次のような文章ではじまる。

「1701年2月10日にヤクーツクからのコサック・ピャティデシャツニック⁷⁾のウラジーミル・アトラソフがシベリア総督府に現れ、質問に対して次のように答えた⁸⁾。」（Оглоблин 1891：11）

つまり、この報告書はアトラソフ自身が書いたものではなく、アトラソフの話に従い、シベリア総督府の書記が書いたものとなっている。

「彼は203年⁹⁾8月下旬に皇帝陛下のヤサークを徴収するためにヤクーツクからアナンディリ冬営地へ旅立った。彼と一緒におよそ13人のヤクーツクの役人がいた。ヤクーツクを出たら、ボートでレナ川を渡り、馬車に乗ってトウヒと牧草地を抜けて、アルダン川まで約3日間かかった。1日の距離は30ベルスタ¹⁰⁾になっている。（後略）」（Оглоблин 1891：11）

報告書の約4分の1は、アトラソフとその隊がカムチャツカに到着する前に辿った行程をカバーしている。その日常会話的なスタイルは、明らかに学術的な記述から離れているものであり、探検の移動の過程をダイナミックに描写する点において旅行記に近い。

しかし、上記したように、この報告書はもともと口述で行われたアトラソフの聞き取りの文字起こしとなっているので、日付（「203年8月下旬」、など）、距離（「30ベルスタ」、など）や時間（「3日間」、「11日間」、「1日間」、など）の精確さと多さは自発的な発言として不自然であり、それらはそのような情報を求めたシベリア総督府の役人の質問に対してアトラソフが返答したと思われる。なぜなら、総督府を管理していた中央政府にとって、シベリアの奥地を回った人から得た地理的ななどの情報の再確認は貴重なものであり、またヤサーク税を徴収する人として仕事の報告にもなるからである。

7) 50人単位部隊長というコサックの階級。

8) 分析されているすべての引用は、Оглоблин（1891）からのものとなっている。

9) ロシア旧暦の203年は、西暦1695年に当たる。

10) 約32キロメートル。

「アナンディリ冬営地でウラジーミルは約60人の役人と狩人を集めたという。それらの人々と一緒に何をしに、どこへ行ったかに関しては、ヤクーツクから送られたウラジーミルの報告書と彼の訴状で書いてある。」(Оглоблин 1891: 12)

実際にカムチャツカに入り、半島の奥部をはじめて探検することができたアトラソフは、自分の移動について詳細に説明するように頼まれたと判定できるが、実は半島に至る最適な道を既に『第一の話』に具体的に報告したので、『第二の話』からそれは省略された。その代わりに、『第一の話』に焦点を当てられなかったポイント(具体的に、アナンディリ砦に到着した前の流れ)は、おそらく総督府の要求によって細かい報告の対象となった。

「ペンジナでは、あごヒゲの無いコリャーク人が住んでいる。その顔がロシア人っぽく、背丈は普通の人のようである。独自の言語を話している。信仰は何もないが、タンバリンを叩いたり叫んだりするという形の呪術で、ほしいものをなんでも与えてくれる同胞のシャーマンがいる。」(Оглоблин 1891: 13-14)

この文章はクリル人よりコリャーク人のことをテーマとするが、先住民に対するアトラソフの考え方を把握するのにヒントを与える。アトラソフは顔の類似性を認めることでコリャークという相手を自己に近づけ、一見したら平等な関係の土台を作っている。しかし、「っぽい」という不完全な類似は根本的な差異の存在を前提とする。おそらく類似性を崩してしまうこの差異は、あごヒゲのなさで定義される。アトラソフがあごヒゲの有無をそれほど気にした理由は、当時のロシアの文化の影響がある。

キリスト教の旧約聖書には、「彼らは頭の頂をそってはならない。ひげの両端をそり落してはならない」(口語訳、レビ記 21: 5)、ヒゲを失うのが恥ずかしい(サムエル記下 10: 4-5、歴代志上 19: 4-5)などと書いてあり、10世紀をもってキリスト教化されたロシア(Климов 2009: 118)は、ヒゲを大切にすることを文化要素の1つとして受け入れた。原則として、ヒゲ剃りは重罪として見なされ、禁止されていただけでなく、人のヒゲを傷つける行為は犯罪とされ、莫大な罰金の対象とされていた(Тихомиров 1953: 101; Пенской 2017)。このような状況は、ピョートル一世がヨーロッパ化の改革を推進した1698年まで続いた(Шапиро 2017)。

このために、このような文化を背景に持つアトラソフは、それについて報告するほどコリャークのあごヒゲの無さが気になったことは驚くにあたらないだろう。ロシア人にとって、あごヒゲは信仰と強く結び付いていたと思われるので、「あごヒゲの無い」という記述は、ロシア人との大きな差異を示すと同時に、信仰や文化の違いも明白とする。

確かに、次の「信仰は何もない」という部分は、他者を完全に否定するような言い方になり、自己と他者の間にまた壁を作ってしまう。この最後の文章は特に日本語で表現しにくい多少からかうような、見下すような言い方となっている¹¹⁾。

11) ロシア語においての語順はとても柔軟である(Розенталь, Джанджанкова, Кабанова 1998: 250)。つまり、ロシア語には頻繁に使用される語順があっても、英語のように絶対なる語順が特にならない。しかしながら、語順によって文章のニュアンスが変わってくる(Розенталь 2005: 250)。原則として、文章の最後に出てくる語は発話者によって特に注目されたい語となる。このように、「信仰は何もないが(後略)」とい

「そのリュートル人¹²⁾の向こうに川に沿ってカムチャダール人が住んでいる。背が高くなく、中くらいの長さのあごヒゲをしている人で、顔はズィリヤニン人¹³⁾に似てる。(中略)シャーマンばかりで、彼等にはなんの信仰もない。それらのシャーマンは他の異邦人と違って、髪を長くしている。」(Оглоблин 1891: 14)

コリャークの場合と同様に、カムチャダールのあごヒゲについて特に説明し、信仰という概念を通してカムチャダールを他者化する。今回も多少見下す意味も含まれる文章となっている。アトラソフは、コリャークとカムチャダールの信仰に対して同じ立場を取るの、クリル人の信仰についてあまり発言しないが、おそらくそれに関する捉え方はこのパターンから逸脱しないだろう。

「最初のクリル川の向こうに、海の方にまるで島があるように見えた。異邦人は、そこに島がある、そこで石の都市があり、人が住んでいると言う。具体的に何の人かは、異邦人は言うことができない。その島からツェニナ¹⁴⁾の食器、多彩で縞柄の中国製布、多彩な木綿や繻子の上衣はクリルの異邦人の手に来る。そのクリルの異邦人は、彼等が食器や衣服を売るのはなく、ただでくれると語っていた。その島から何に乗ってクリル人のところへ来るのかに関しては、異邦人は言うことができない。」(Оглоблин 1891: 16)

「異邦人は言うことができない」の「できる」「できない」として翻訳されたロシア語の「уметь」は、もともと「知能」という意味の語から由来したとされ(Фасмер 1987: 161-162)、当時のロシア語において「できる」、または「分かる」(より正確に「そういう知識があるので、そのような能力をもつ」と意味した動詞となっていた(Даль 1863-1866)。

このことから分かるように、『第二の話』において頻繁に出てくる「異邦人は言うことができない」という表現は、相手の言語が話せない自分として理解しきれない部分がある、という面より、自分が分かるように説明できない、よく説明するための知識がない、そもそも説明する能力さえ不足している相手の「能力・知識不足」に力点を置いてしまう。相手に無知性などという欠如・不足の表象を与えることは、相手の劣等性を示唆することで、自己の「優越」を強調することになり、意識の上で権力の差にも繋がる。

また、ロシアの歴史を顧みると、言語と他者性の相互関係は実に長い歴史をもっていることが分かる。もともと、ロシア語が分からない異邦人のすべてを、その民族性・国民性を問わずに«немцы»(「ネムツィー」。文字通りに「哑者(あしゃ)」、つまり、「口の利けない人」と呼んでいた(Todorov 1999: 76)。現在はその語はドイツ人だけを指すようになったが、その語の歴史からするとやはりロシアにおいて言語能力の有無は以前から知識・理性の有無として解釈されていたことが明らかになる。他の国・文化からも似たような事例は報告されている(Todorov 1999: 76)。

う最後の長い文章の原文を見ると、コリャークがある種の信仰心からシャーマンを頼りにするが、それは「真」の信仰(おそらくキリスト教)と比較にならないので、信仰とも呼べない、というような読み取りはできなくもない。

12) アリュートル人。

13) コミ人の旧称。

14) 特別な技法で焼かれた陶土のこと。Ценина。

最後に、無主地（Terra nullius）としてのカムチャツカの話（下記を参照に）にも繋がるが、千島列島方面からカムチャツカにやってくる貿易相手の正体は、ロシアの興味を特に引いたはずである。「石の都市」という伝聞、そしてそこから持ち込まれる商品の詳細に基づき、ロシア人はクリル人の貿易相手をおそらくカムチャツカ先住民族より高い発展段階の地方に由来する人々として位置づけたと思われる。そのような外国からの商人がカムチャツカに来ることは、当然ながらも、その外国においてカムチャツカについての知識があるだけではなく、カムチャツカにはその影響があることを意味し、その国はロシアより先にカムチャツカを自分の領土とする可能性がなくもなかった。そのような状況になったら、ロシアに対して必ずしも好意をもつと限らない国の領土となったカムチャツカは、ロシアのシベリアに隣接するようになり、地域の緊張感を高め、ロシアの権力を脅かすこととなる。この側面から考察すると、そういう可能性を導入したアトラソフの報告はカムチャツカの植民地化を促進したかもしれない。

「カムチャダールの地方の山脈にトナカイのコリヤーク人¹⁵⁾が住んでいる。

それらのカムチャダールツィ¹⁶⁾に、ロシア人が話すことになるあらゆる話題を、ロシア人のところに住んでいる捕虜はコリヤーク語で話してくれる。ウラジミール自身はコリヤーク語とカムチャダール語でなにも話せない。」（Оглоблин 1891：14）

この節において旅行記や科学的記述というジャンルから普段に省かれる情報が書かれており、報告書としての特徴的である。その特徴は、探検家・研究者自身の言語能力、そしてそのインフォーマントに関する記述である。

カムチャツカにやってきたロシア人は、生活上、調査上などの理由で未知のカムチャツカについての情報を求め、知りたいこと、また、ヤサーク取りに関係することを先住民族に尋ねることになるだろう。その際、先住民族の囚人はインフォーマントとの交流において通訳者の役を担ったが、ロシア人に近かった者としておそらくインフォーマントでもあったと推測できる。しかし、それらの捕虜はインフォーマントであった場合にしても、その名前、性別、年齢、人数、などの詳細がやはり記述されずに、不明のままである。それは、情報を提供した人のテキスト内の存在感を最低限にすることによって、一見して「知識・能力のない」先住民族をインフォーマントとして頼りにするという矛盾を抑え、得られた情報もより客観的で正確なものとして表象することができる。

そのために、アトラソフはそういう情報を報告の対象とした理由はかなり分かりやすい。なぜなら、中央政府は、ロシア人と先住民族の関係はもちろん、カムチャツカ先住民族の言語能力が不足しているアトラソフのカムチャツカについての情報源も気になったと思われるからである。

「カムチャツカ川の川口から一週間上ると、山がある。パン麦のスタックのように非常に大きくて高い。その近くにはもう一つの山は積みわらに似ており、とても高い。日中は煙、夜は火の粉や赤みが見られる。カムチャダールはこう語る：その山を人が途中まで登ったら、人間が耐えられないほど大きな雑音や轟音が聞こえる。登り続けた人たちはもう戻ったりしなかったと言うが、彼等は山で何に遭ったのかは誰も知らない。」（Оглоблин 1891：15）

15) 遊牧コリヤークのこと。

16) ここはカムチャツカの人を示す。

ここにおいて『第二の話』のもう1つの、人をその住んでいる環境から切り離さない、という特徴が特によく見られる。アトラソフの後の一般的な記述（特に科学的なジャンルのもの）において環境（自然）とそこに住む人（文化）は分別されがちであるが、アトラソフはカムチャツカの川、山、などという地形の詳細と特徴などを記述するだけではなく、（この文章の場合には）山について現地の人々の知識・感想も地形の話と一緒に取り上げる。通常は、そういう情報は地形、民族というテーマに区別されている。

スウェーデンの博物学者、生物学者、植物学者のカール・フォン・リンネ（Carl von Linné）によって1735年、そして1751年、1753年に発表された分類法が簡潔で、分かりやすかったので、幅広く使われるようになり、結果的にヨーロッパ人の世界の捉え方、すなわち旅行記の書き方にも変化をもたらした。『第二の話』は地形と民族のテーマを区別しないことがリンネ分類体系導入前の時代そのものの特徴、そして口述的な報告に基づいた報告書としての特徴になっていると考えられる。なぜなら、自発的な発言の場合は、情報がある体系に基づき整理するのが困難であり、それよりあるテーマ（例えば、山）に関わるすべての情報を話す傾向があるだろう。

「カムチャダールツィの向こうにクリルの異邦人が住んでいる。彼等はカムチャダールツィより黒っぽい外見をしており、ヒゲもより小さい。クリルの地方は、カムチャダールの地方より暖かい。服は、カムチャダールツィと同じものを着ているが、カムチャダールツィに比べれば貧しい。彼等はクロテンももっているが、たぶん地域が温暖なためにその質が悪い。一方では、大きいラッコやアカギツネがたくさんいる。」（Оглоблин 1891：14）

以前の例と同様に、クリル人の外見についてあまり言及しない一方、そのヒゲだけについて特別に説明する。しかし、彼らの記述は、カムチャダールとの比較に力点を置いているので、カムチャダールの記述から切り離せない状態となっており、クロテン、ラッコ、などの自然資源以外についての独立した詳細はあまりない。クロテンなどの動物の毛皮はヤサークの対象とされていたので、それについての報告は中央政府としては重要な情報となると思われる。なぜなら、どの民族から、どのようなヤサーク（毛皮の種類、量、質、など）を期待できるかに関係しているからである。

比較の話に戻ると、カムチャダールの一族と協力的関係を結んだアトラソフ隊は、他のカムチャツカ先住民族よりカムチャダールとの接触がより多かった影響で、そのことをよりよく分かっていたと判定できる。そのために、ロシア人にとってある程度馴染みがあるカムチャダールをある種の「比較の水準」にしたのは驚くに及ばないだろう。

また、「貧しい」として翻訳されたロシア語の«скудный»は、質の悪さを示すだけではなく、種類の少なさとしても理解できる。

「上記の異邦人は大いなる統治をもてずに、ただ彼等の一族の中でより豊かな人がより大きな尊敬を受けているだけである。それに、それぞれの部族はお互いに戦争をしたり、戦い合ったりしている。夏には、男性の異邦人は皆裸になっている。戦いに対しては、ときとして勇気満々で、ときとして苦手で慌ただしくしている。以前は、それらの異邦人は貢ぎ物を一度も取られたことがない。」（Оглоблин 1891：15）

この文章において、ロシアの中央政府にとってかなり重要なはずの情報が含まれている。なぜな

ら、「大いなる統治」（つまり、領主）がないということと、「貢ぎ物を一度も取られたことがない」ということは、貢ぎ物などを求めるほど強い国がカムチャツカ半島にまだ辿りつけなかった、つまり、ロシア帝国は他国からの圧力を心配せずにカムチャツカの土地を占拠し、自分の領土にすることができたことを意味していた。先住民族の間に常に続いていた紛争は、カムチャツカという無主地の占拠においてさらに有利な状況であったはずである。

「それらの異邦人は部族対部族という形で争い合っている。火の武器¹⁷⁾を非常に恐れて、ロシアの人々を火の人々と呼んでいる。彼等のロシア人との戦いは、ロシア人に立ち向かうところまでだけであった。火の武器に耐えられず、逃げて帰る。冬には、カムチャダールがスキーで、トナカイ遊牧のコリヤークはそりに乗って戦いに出ている。そりは一人がそりを操る、もう一人が弓を打つというやりかたになっている。そして夏には、彼等は徒歩で裸の姿で、ある人は服を着ながら戦いに行く。」（Оглоблин 1891：15）

新しい領土の占拠になると、当然ながらもその住人からの抵抗は予測される。そういう恐れも報告に反映される。先住民族が使う武器や移動手段、ロシア人とのここまでの戦いの流れ、などという情報は、先住民族の抵抗・反逆を抑える鍵となっており、中央政府の方針も決める。

「彼等は瑠璃色のガラス玉やナイフという商品を求めている。一方、彼等からクロテン、キツネ、大きなラッコ、カワウソをとれる。」（Оглоблин 1891：15）

戦争の話と同時に、経済的な状況についても報告される。この場合、商売は協力関係、またはある種の信頼の土台を築く方法の1つとしても考えられるだろう。

また、各民族の紹介後、ほとんどの場合に文脈からも区別が付かないほど、それら異なる民族を包括して「異邦人」として表象するようになったことが分かる。その理由はおそらく、民族研究より経済・資源を重視する傾向にあるだけではなく、報告者（または報告を受けたシベリア総督府の役人たち）にとってどの先住民族も同じ他者であったことにもあると推測できる。

「シベリアの異邦人全員はなんの礼儀ももたない。不良な人々で、清潔さは全くない。」（Оглоблин 1891：18）

『第二の話』の最後に出てくるこの文章からすると、著者の上記した推測はほぼ正しいと言えるのではないだろうか。

6. 結論

本研究では17世紀のロシア側探検家・研究者の記述におけるカムチャツカ先住民族、特にクリル人をめぐる表象を考察してきた。アトラソフの『第二の話』の分析してきた内容を顧みて、重要な点をまとめる。

・テキストにおける報告者・著者の存在感：アトラソフの『第二の話』は、報告が元々口述で

17) 銃のこと。

行われたことを反映する特殊なスタイルを担い、その大部分は「カムチャツカへの旅」—「カムチャツカ北部への到着」—「北部から南部まで行く途中での出来事、出会った現地人、観察した地理、動植物、など」—「カムチャツカ南部への到着」という直線的な時間の流れに規定されている。自分の経験に基づいて個人が行った報告としてアトラソフの考えも載っており、彼の存在が感じられる。

- ・先住民族に関する言葉遣い：『第二の話』の中でアトラソフはカムチャツカの民族のことをいつも「異邦人」（«иноземцы»、文字通りに「（私たちと）異なる地方の者たち」）というが、正確に言えば、カムチャツカという地方とその住人にとってアトラソフ自身（とその探検隊）は異邦人であったはずである。
- ・視点の眼差し：アトラソフはカムチャツカの自然資源および経済を特に注目し、どの民族はどのような動物を狩る、どの素材の家、服を持つ、などのようにカムチャツカ先住民族もこの視点から見がちである。
- ・先住民族の他者化：アトラソフの文献の中に正の自己（「文明」出身のロシア人）—負の他者（「野蛮」な先住民族）という二項対立的な考え方は明白となっており、クリル人も含めカムチャツカ先住民族に対する信仰・宗教、そして言語による他者化、つまり、否定に至る。しかし、アトラソフの『話』は報告から190年後に初めて歴史学論文集の一部として出版されたが、報告当時は限られた人（例えば、報告を受けたシベリア総督府の役人、皇帝ピョートル一世）しかその内容を見なかったで、カムチャツカはもちろん、他の地域の先住民族の他者化はロシア人社会の中で再生産させることにならなかった。通常、その時代において探検家・研究者のノートは出版物として出されており、幅広い大衆に読書されていた。そして人は出版物の内容から思想（正の自己—負の他者、など）をそのまま吸収し、社会内に広め、そのような考え方を自分から発信し再生産することによって他者の支配などが正当化されることになる。
- ・区別・分類の問題：アトラソフは先住民族の生活において自然資源と直接・間接に関係のあるものを記述することが多いが、経済重視の影響で他の側面は除外され、結果的にどの異なる民族でも同じ「異邦人」として扱われてしまった。学者ではなかったアトラソフは先住民族にそれ以上にあまり興味を持たなかったか、それともアトラソフの聞き取りを行ったシベリア総督府の役人たちの無関心によってそれに関する情報はただ記述されなかったという可能性が考えられる。
- ・カムチャツカ先住民族の他者表象：分析されてきた文献の中でプラスイメージの自己—マイナスイメージの他者という二項対立的な考え方が明白となっており、言語、そして宗教・信仰の相違に基づいた他者化は特によく見られる。

参考文献

《邦文文献》

- 大谷裕文（2011）「ポストコロニアル論」『文化人類学 20 の理論』綾部恒雄（編集）、pp.266-283、弘文堂。
- 大塚和夫（2008）「植民地主義」『文化人類学キーワード 改訂版』、山下晋司、船曳建夫（編集）、pp.178-179、有斐閣双書。
- 久米博（2020）「オリエンタリズム」『日本大百科全書（ニッポニカ）』デジタル版、小学館。https://kotobank.jp/word/オリエンタリズム-169824。2019年5月11日閲覧。

- 桑山敬己 (2014a) 「民族誌と文化の表象」『よくわかる文化人類学第2版』桑山敬己、綾部恒雄（編）、pp.188-189、ミネルヴァ書房。
- 桑山敬己 (2014b) 「オリエンタリズム批判」『よくわかる文化人類学第2版』綾部恒雄、桑山敬己（編）、pp.190-191、ミネルヴァ書房。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 (2011a) 『中級アイヌ語—千歳—』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 (2011b) 『中級アイヌ語—美幌—』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 (2011c) 『中級アイヌ語—幌別—』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 (2012a) 『中級アイヌ語—静内—』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 (2012b) 『中級アイヌ語—十勝—』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 (2014a) 『中級アイヌ語—石狩川—』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 (2014b) 『中級アイヌ語—カラフト—』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 (2014c) 『中級アイヌ語—沙流—』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 日本聖書協会 (1955) 『口語訳聖書』、日本聖書協会。

《英文文献》

- Escobar, Arturo (1991) "Anthropology and the Development Encounter: The Making and Marketing of Development Anthropology". *American Ethnologist* 18 (4): 658-682.
- Hamadi, Lutfi (2014) "Edward Said: The postcolonial theory and the literature of decolonization". *European Scientific Journal* 2: 39-46.
- Kohn, Margaret & Reddy, Kavita (2017) "Colonialism". In E. N. Zalta (ed.) *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2017 Edition), Stanford University, <https://plato.stanford.edu/entries/colonialism/>. Retrieved 5 October 2020.
- Lantzeff, George V. & Richard A. Pierce (1973) *Eastward to Empire: Exploration and Conquest on the Russian Open Frontier to 1750*. McGill-Queen's Press-MQUP.
- Mtaiiri, Naifa (2019) "Edward Said: Post-colonial Discourse and Its Impact on Literature". *Education and Linguistics Research* 5(1): 1-10.
- Said, Edward (1979) *Orientalism*. Vintage.
- Sato, Tomomi & Bugaeva, Anna (2019) "The study of old documents of Hokkaido and Kuril Ainu: promise and challenges". *Northern Language Studies* 9:67-93.
- Todorov, Tzvetan (1999) *The Conquest of America: The Question of the Other*. University of Oklahoma Press.

《露文文献》

- Акулов, А.Ю. (2017) Курильско-Камчатский диалект айнского языка: Вводный курс. Ridero.
- Аров, В.Н. (2003) «Лиша чинов... сослать в Камчатку». Вестник КРАУНЦ. Гуманитарные науки 2: 53–68.
- Белов, М.И. (1957) Новые данные о службах Владимира Атласова и первых походах русских на Камчатку. Летопись Севера 2: 89–106. Государственное издательство географической литературы.
- Берг, Л.С. (1935) Открытие Камчатки и Камчатские экспедиции Беринга. 1725–1742. Издательство Главсевморпути.
- Берг, Л.С. (1949) Открытие Камчатки Владимиром Атласовым. Вестник Академии Наук СССР 8: 20–27.
- Введенский, Б.А. (ред.) (1953) Большая советская энциклопедия, том 19. Государственное научное издательство «Большая советская энциклопедия».
- Воробьева, Т.В. (2012) Калифорнийская историческая школа о расширении территории Российского государства. Камчатский государственный университет им. Витуса Беринга.
- Воробьева, Т.В., Елизарова, В.О., Ильина, В.А., Камардина, Н.В., Кошкарева, С.Г., Кириллова, А.И., Пасечник, А.Ф. и А.С. Сесицкая (2015) Аспекты государственной политики на Северо-Востоке России в XVIII - первой половине XX вв. : методы, содержание, результаты. Камчатский государственный университет им. Витуса Беринга.
- Высоков, М.С., Василевский, А.А., Костанов, А.И. и М.И. Ищенко (2008) История Сахалина и Курильских островов с древнейших времен до начала XXI столетия. Сахалинское книжное издательство.
- Габышев, Е.С. и А.Э. Маякунов (2018) К вопросу о присоединении Камчатки к Российскому государству. Общество: философия, история, культура 6 (50): 29–34.
- Даль, И.И. (1863–1866) Толковый словарь живого великорусского языка, части 1–4. Общество любителей российской словесности. — URL: <http://slovardalja.net/word.php?wordid=39466>. Дата обращения 18.10.2020.
- Каракин, В.П. (2014) Дальний Восток России - обретение границ, имени и специфики в «Проблемном поле» страны. Вестник Дальневосточного отделения Российской академии наук 5 (177): 118–131.
- Климов, Е.В. (2009) К вопросу о продолжительности и периодизации христианизации Древней Руси. Вестник Челябинского государственного университета 16 (154): 117–122.
- Крашенинников, С.П. (1755a) Описание земли Камчатки: том 1. Императорская Академия Наук.
- Крашенинников, С.П. (1755b) Описание земли Камчатки: том 2. Императорская Академия Наук.
- Оглоблин, Н.Н. (1891) Две «сказки» Владимира Атласова об открытии Камчатки. Чтения в Императорском обществе истории и древностей российских при Московском университете 3 (158): 1–18. Университетская типография. — URL: http://ostrog.ucoz.ru/publikacii_2/4_64.htm. Дата обращения 15.06.2020.
- Окунь, С.Б. (1935) Очерки по истории колониальной политики царизма в Камчатском крае. ОГИЗ. Соцэкгиз. Ленинградское отделение.

- Полевой, Б.П. (1982) Первооткрыватели Курильских островов: из истории русских географических открытий на тихом океане в XVIII в.. Дальневосточное книжное издательство. Сахалинское отделение.
- Полевой, Б.П. (1997a) Новое об открытии Камчатки: часть 1. Камчатский печатный двор.
- Полевой, Б.П. (1997b) Новое об открытии Камчатки: часть 2. Камчатский печатный двор.
- Розенталь, Д.Э. (2005) Справочник по правописанию и литературной правке. Айрис-Пресс.
- Розенталь, Д.Э., Джанджакова, Е.В. и Н.П. Кабанова (1998) Справочник по правописанию, произношению, литературному редактированию. ЧеРо.
- Сгибнев, А.С. (2005) Исторический очерк главнейших событий в Камчатке. 1650–1855 гг. Вопросы истории Камчатки, выпуск 1. Камчатский государственный технический университет. — URL: <http://www.npacific.ru/np/library/publikacii/historykam/istkam1-1.htm>. Дата обращения 29.06.2019.
- Сергеев, В. Д. (1992) Страницы истории Камчатки (дореволюционный период). Дальневосточное книжное издательство.
- Стеллер, Г.В. (1999) Описание земли Камчатки. Камчатский печатный двор.
- Таксами, Ч.М. и В.Д. Косарев (1990) Кто вы, айны?. Мысль.
- Тихомиров, М.Н. (1953) Пособие по изучению Русской Правды. Издательство Московского университета.
- Тураев, В.А. (2012) Исторические последствия этнокультурных контактов на российском Дальнем Востоке (XVII-XVIII вв.). Россия и АТР 3 (77): 126–137.
- Тураев, В.А. (2018) Этническая история айнов Сахалина и Курильских островов в контексте российско-японских территориальных размежеваний. Россия и АТР 2 (100): 213–230.
- Фасмер, М. (1987) Этимологический словарь русского языка в 4 томах, том 4. Прогресс.
- Шапиро, Б.Л. (2017) Русский костюм: между царством и империей. История: факты и символы 3 (12): 132–139.
- Штернберг, Л. Я. (1936) Первобытная религия в свете этнографии. Институт народов Севера.
- Шубин, В.О. (1992) Жизнь «курильцев» на Камчатке в 1877–1888 гг.. Краеведческий бюллетень Сахалинского областного краеведческого музея 4: 37–52.

Atlasov's "Second Story": The indigenous people of Kamchatka as seen by Russian explorers in the 17th century —with the focus on the Kuril people—

Irina SKUTINA

(Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)

This paper is focusing on reading the materials compiled by Russian explorers who visited the Kamchatka Peninsula in the 17th century as ethnography while considering the historical background of the time. The main purpose is to focus on how the Kuril people who lived on the southernmost tip of the Kamchatka peninsula and the adjacent islands of the Kuril Islands were described and represented in written works, as well as to consider the meaning and reasons behind one or another way of representation.

The Kamchatka Peninsula was “discovered” by the Russian Empire’s cossacks in the middle of the 17th century and was made Russian territory by Atlasov’s expedition in 1697. Like other Siberian regions that have become part of Russia, Kamchatka has been the subject of all aspects of study. Of course, the indigenous people of Kamchatka were not an exception, as Russians documented their physical characteristics, language, and lifestyle. One of such indigenous peoples was the ethnic group called “Kurils” who lived in the southern tip of Kamchatka and the islands of the Kuril Islands extending south from the peninsula. This ethnic figure disappeared from Kamchatka at the beginning of the 19th century, but there are some descriptions left by those who explored Kamchatka at the time.

Information about the Kuril people in Russia was first mentioned in the report of cossack Vladimir Atlasov in the 17th century. Most of these descriptions have been the subject of historical research; however, they have not been fully studied from an anthropological perspective until now. Their coming to Kamchatka inevitably brought Russians into contact with indigenous peoples, including the Kuril people. Reading the Atlasov records, the author of this paper relied on the criticism of Orientalism, frontier and contact zone theories to analyze the representation of others in the colonial situation. The paper reveals new aspects of the history of Kamchatka and the Kuril Islands, and the relationship between Russians and indigenous peoples, especially the Kuril people.